九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

福永光司著『道教と日本文化』

佐藤, 明
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/18074

出版情報：中国哲学論集. 8, pp.75-82, 1982-10-01. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

書評

福永光司著『道教と日本文化』

佐藤　明

著者の福永光司氏は、道家思想・道教の研究家として知られるが、最近特に道教の日本文化に与えた影響という問題に関心を持たれ、日本文化を新しい視点から考えようとされる点で注目されている。本書は、この問題について講演されたもの、或いは研究報告として筆録されたもの、さらには随筆として発表されたものなどを一冊の書物にまとめられたものである。

本書は十八章のそれぞれが独立した短篇より成っている。その構成は次の通りである。

(1) 日本の古代史と中国の道教――天皇の思想と信仰を中心として――
(2) 日本古代の神道と中国の宗教思想
(3) 八角古墳と八稜鏡――古代日本と八角形の宗教哲学――
(4) 聖徳太子の冠位十二階――徳と仁・礼・信・義・智の序列について――
(5) 山上憶良と病気――日本古代の道教医学――
(6) 平安時代の道教学
(7) 風に乗る仙人
(8) 中江藤樹と神道
(9) 江戸期の老荘思想

(10) 益軒の『養生訓』と梅園の『養生訓』
(11) 三浦梅園と『荘子』と陶弘景
(12) 三浦梅園と道教
(13) 岡倉天心と道教
(14) 日本人と老荘思想
(15) 「木鶏」の哲学――名横綱双葉山によせて――
(16) 『観音経』と道教――日本人の観音信仰によせて――
(17) 京都と大陸の宗教文化
(18) 道教の研究と私――あとがきにかえて――

（なお章の上の数字、(1)・(2)などは評者が便宜上施したものである）

本書は、構成を一覧しただけからも感じられるように、バラエティーに富んだ様々の内容からなり、専門家にとっても一般の読者にとっても興味をそそられるものが多く、感興の趣くままにどこからでも手を染めたくなるような、広い展望を孕んだ労作である。

さて本書は、『道教と日本文化』と題されているように、日本文化に与えた道教の影響という問題が主要テーマとなっている。

(18) 道教の研究と私――あとがきにかえて――

は、著者が本書をまとめるに当って〝あとがき〟として書き加えたものであるが、その中で著者自身道教との邂逅について触れておられる。京都大学人文科学研究所の共同研究で『弘明集』や『白氏文集』を会読する中で道教に関心を寄せていた著者が、本格的に道教の研究に進まれたのは、人文科学研究所の同僚であった上山春平教授の「日本古代学に対する精力的な勉学と鋭く新鮮な見識とに圧倒され」た（本書二四〇頁）からであると自ら述べておられる。以後道教の教典である『正統道蔵』を読み進められ、道教の研究は『道蔵』を読み通し、もしくは読み通すことを前提とし

てなされるべきである（二四一頁）と主張する著者が考えておられる道教の定義とは、

「道教とは、中国古来のシャーマニズム的呪術信仰を基盤とし、その上部に儒家の神道と祭祀の儀礼・思想、老荘道家の『玄』と『真』の形而上学、さらには仏教の業報輪廻と解脱、ないしは衆生済度の教理・儀礼などを重層的・複合的に採り入れ、隋唐の時代において宗教教団としての組織と儀礼と神学とを一応完成するに至った、〝道の不滅〟と一体になることを究極の理想とする中国民族〔漢民族〕の土着的・伝統的な宗教である。」（二四六頁）

というものである。これは著者自らが、「私のこの定義が、これまでのわが国内外の道教研究者の定義と異なる点は、儒学――特に易学と礼学――、および仏教の教理学を道教の神学〔宗教哲学〕の中に包みこみ、もしくはその中に組みこもうとすることにある。」（二四六頁）と述べておられるように、道教それ自体だけを限定して考えるのではなく、広い中国思想史の中で、儒教・仏教を含んだ広い視野の中で道教をとらえようとする点に著者の特徴がある。

さて、著者が特に道教と日本古代の宗教思想との関係に関心をもたれたのは、一つには既に述べた上山教授の影響であり、今一つは〝天皇の都〟である京都で大学生活を過ごされ、「天皇の統率したまう」「わが国の軍隊」の兵士として青春時代の数年間を中国大陸の戦場で過ごされた（二四七頁）ためであると述べておられる。従って本書で採り上げられる様々の問題の中でその出発・中心となるのは、日本古代の「天皇」及び「神道」の問題であると考えられるので、今回の書評では、

(1) 日本の古代史と中国の道教――天皇の思想と信仰を中心として――

(2) 日本古代の神道と中国の宗教思想

の二つを中心に見てみたい。特に(1)は本書のいわば〝序〟にも当るものであり、著者の基本的考えが示されていると思われるので、まずこの部分を紹介してみたい。

始めに著者は、従来の日本の古代史、特に古代宗教思想史の中で、道教が殆ど見るべき影響関係を持たないと考えられてきた主要な原因として二つのことを指摘しておられる。

その一つは、本居宣長を代表とする国学者達の学説で、日本の古代を神代として捉え、日本の古代社会を歴史的事

実とは異なる純粋に理想的な宗教的世界を観念的に設定したことによるとされる。また今一つは、仏教の僧侶達の主張であり、他の宗教、特に中国の道教に対して激しい非難と攻撃を加え、道教は単なる鬼道でしかなく、それは仏教によって超克されねばならないとする主張によるものであるとされる。これら国学者や僧侶達の主張に起因して、日本古代史の研究者（新しくは津田左右吉や和辻哲郎の日本文化論など）も、宗教については仏教のみに注目し、道教の神学や教理学を学問的に研究し、それらを日本古代の宗教思想との密接な関連性を実証的に究明しようとする学者は殆どなかったとしておられる。

しかし、著者はそれらの見解に疑問をもたれ、道教が日本古代の宗教思想に対して重要な影響関係を持っていると考え、具体的に七つの例を挙げ、それぞれについて考察されておられる。それらを簡単にまとめると、

(一) 「天皇」の語は、中国に由来するもので、それは北極星を神格化した神の名であり、また「真人（しんじん）」の語も仙道の体験者である「真人」に由来すること。

(二) 天皇の位を象徴する二種の神器（「鏡」と「剣」）を尊ぶ考えは、道教にも見られること。

(三) 皇室では紫の色を尊ぶが、道教の神である「天皇大帝」が住む所を「紫宮」と呼ぶこと。

(四) 「天孫降臨」の考えが、例えば『太平経』の中などにも見られ、また「神である人間」即ち「現人神（あらひとがみ）」の思想も、古くは『荘子』の中で「神人」・「真人」という形で現れるのを始めとして道教に見られること。

(五) 天皇の長寿を祈願する祝詞の文章の中に「東王父」「西王母」「皇天上帝」「三極大君」などの神の名が見られるが、これらは道教または道教的な神の名であること。

(六) 天皇が元旦に行う「四方拝」の儀式は、中国の道教の宗教儀礼をそのまま日本に持ち込んだものであること。

(七) 『日本書紀』で初めて用いられる「神道」の語は、中国の「神道」の概念をそのまま採り入れていること。

ということになるであろう。

著者は以上の結びとして、「……日本神道の教理学が宗教哲学〔神学〕として次第に理論化されていくようになりますと、その宗教哲学〔神学〕のなかには必然的に中国の道教の教理学が全面的に導入されてくることになります。日本における伊勢神道や垂加神道、吉田神道や平田神道などの具体的な教理学の内容が、この経緯と始末とを明確に

示していると考えられますが、その十分に学問的な実証は、なお今後の重要な研究課題として残されております。」（一八頁）と述べ、日本文化の中で中国の道教がいかなる影響を与えたかという従来扱われなかった学問分野への道があることを示唆されるのである。

次に第二章、

(2)　日本古代の神道と中国の宗教思想

では、第一章と視点を換えて（例えば平田篤胤の神道観を通して見ることなど）日本の古代の神道を考察されている。さらに古事記の個々の記述における道教の影響について触れ、古代日本社会における道教の影響を重ねて明らかにされている。また以下の第三章から第七章に至るまでは、平安期以前の文化に与えた道教の影響について様々の問題をとりあげておられる。

しかし、ここで特に注目したいのは、第二章の第四節に当る「中国古代の神道の系譜」（四三頁以下）で触れている著者の中国古代哲学における神道観についてである。著者の立場とは、「上帝を原点に置いて、これを否定する方向と肯定する方向に中国古代思想史の展開を大きく二つに分けるという考え方」（四五頁）である。ここでいう「上帝」とは、『詩経』や『書経』に出てくる宇宙の最高神である「昊天上帝」のことで、その否定の方向というのは、言葉を換えれば原理化の方向であり、例えば儒家が「天」、道家が「道」、法家が「法」というように各学派が「上帝」をそれぞれ原理的なものに置き換えたことを指すのである。一方、上帝を「肯定」する方向とは、

〔墨子〕⟶〔董仲舒〕⟶〔道教〕

と図式されるもので、「上帝」が人の行為によって「賞・罰」或いは「災異・祥瑞」を与えるというものであり、道教の功過の思想もこの流れの上にあるとされる。

さて、ここで著者の中国古代の神道観について触れたのは、著者自らがこの章の最後に、「日本における神道と中国における宗教思想とのかかわり合いの問題も、もっと大きなパースペクティブをもって展望し、東アジア的な視野をもって研究することが必要だと思います。そのためには中国における神のある文明の流れ――有神論の思想の系譜

――にあらためて注目し直さなければならないと思うのです。」（五五頁）と述べておられるように、日本思想史への道教の影響を見る上でもこの問題が重要であると考えるからである。

第八章以下、〝あとがき〟に当る第十八章を除く第十七章までは、主に江戸期以降の道教及び老荘思想の日本における受容の問題がテーマであると言えよう。このうち特にこの問題を概括的に扱ったのは、

(9)　江戸期の老荘思想

(14)　日本人と老荘思想

の二章である。第九章のしめくくりに、

「ただしかし、老荘の思想もまた儒教のそれと同じく本来中国の思想であった。中国の思想に対する日本的な思想の自覚は必然的にまたこの老荘思想をも排撃する。老荘思想はその矛盾と屈折の中で日本的な思想の独自性を発酵させる触媒の役割を江戸期では果していたように思われる。」（一二六頁）

と述べておられる。恐らく著者は、日本的な思想（神道）と中国の思想（儒教）は本来異質であり、それを繋いで日本的な独創的なものを確立する役割を江戸期の老荘思想が果したと考えておられるようであり、これは中国思想の日本での受容という立場からすれば従来なかった新しい視点であると言えよう。

以上本書の内容を概観してきたが、本書は従来ほとんど扱われなかった道教の日本文化への影響という問題を採り上げたもので、また形の上から見ればいわばエッセイ集と言うべきものである。従ってこの書評においても、個人的感想をも含めて自由な立場から見ようと考えるが、その際本書から今後発展して考えられるであろう道教を含めた中国思想がどのように日本思想史に影響を与えたかという問題、これからの日中両思想史の比較・関係についての課題に限ってみたい。

第一に、日本に影響を与えた道教をいかに概念規定するかという問題を挙げたい。例えば中国も日本も同じ農耕文明であり、大陸か島国かの相違はあるものの地理的にも近く、恐らくは人種的にも近い関係にあるであろう。すると

宗教信仰においても多くの点で同じような発想をとるのではないかと考えられる。具体的に言えば、土偶に代表されるような原始信仰、古墳の埋葬品などより想像される死後の世界への期待、さらには本書に述べられている古代神話など、それらを日本古来のものと見るか道教の影響と見るか、それを何を基準にして考えるかという問題が想定されよう。その際中国における道教の定義とは別に、日本において何を或いはどこまでを道教と考えるかという定義が必要になってこよう。

第二に、第一とも関連して中国の道教を見る必要があることはもちろんであるが、道教の基盤ともなった著者の言われる「有神論の思想の系譜」を考える必要があろう。著者も述べておられることであるが（四四頁）、従来のシナ学は儒教の教典中心でいわば無神論の系統に重点が置かれていたが、今後は逆の立場である有神論の系統、或いは従来の研究で見過されてきた「神」の思想を考察する必要があろう。その際重要になるのは、一つには今まで研究の遅れていた墨家の思想であり、今一つは道教と密接な関係にあると言われる道家の思想であろう。この研究の方向に示唆を与えるものとしてニーダムの優れた業績もあるが、ここでは本書とほぼ同時に公にされた曽布川寛氏の『崑崙山への昇仙――古代中国人が描いた死後の世界――』（中公新書）に注目したい。この書は美術史・考古学の立場より中国古代の宗教信仰を思想史とは異なった視点から実証的に扱った点で注目すべきであろう。いずれにせよ道教の日本への影響を考える場合、日本・中国双方の神学を正確にとらえることが必要であると言えよう。

第三に、江戸期以降の道教或いは道家の影響を見る場合、古代とは異なった面があるのではないだろうか。江戸時代に老荘思想の流行を見たが、（それは五山文化に源を発するものと考えられるが、）江戸期には道教よりも老荘そのもの、しかもそれは書物を通しての知識からの受容が高いウェイトを占めていたように想像される。従って江戸以降の道家思想の影響については、より実証的に考えられるであろう。先にも紹介したように著者は江戸期の老荘思想を儒教と神道を繋ぐものとしてとらえたが、その性格を文献の上からも明らかにすることは可能であろう。

第四に、明治以降については、道家思想の影響が、反俗の徒・或いは社会主義の立場に立つ、坪内逍遥・中江兆民・幸徳秋水らに顕著に見られるが（一九一頁）、それらを江戸期の老荘思想の流れと連続して見た場合どのような経過があって展開したのかも注目すべき点ではないかと考えられる。

さて、著者の福永光司氏は、中国における老荘思想史の研究が専門であり、特に『荘子』(中公新書)は多くの反響を呼んだ書であるが、最近では道教、さらには道教の日本文化への影響へと専門を広められている。著者の研究を一覧して思い合わされるのは、津田左右吉博士の業績である。博士も『道家の思想とその展開』を著わされ、中国古代思想史の研究と共に日本思想史の研究、さらには中国思想の日本思想史への影響についての研究にまで及び、いわば津田学というべきものを打ち立てられた。

中国思想史の分野では、津田学はしばしばテキストの操作において懐疑的・批判的過ぎるとの評価を受けてきたが、最近の考古学的発掘の成果などから考え合わすと、むしろ津田博士の見解の実証性が確認される方向へ進んでいるように思えるし、『満鮮歴史地理研究』の分野においても同様のことが指摘されている。また日本思想史・日本文学史の研究に対する評価は周知の通りである。

福永氏も指摘されるように、津田博士の日本思想史研究において道教の影響について重視しなかったという点もあり問題点も多いであろうが、中国思想の日本思想史への影響について一定の見解を示した点では重視すべきであり、この分野の研究を学問として成立させてゆく場合、やはり津田学の成果を軸にして考察すべきではないかと考える。

従来の中国思想史の研究では、中国思想の日本への影響という問題はもとより、中国思想を今日の社会に紹介し、いかに活用させるかという点について問うたものはほとんどなかったと言えよう。本書が評価される第一の点はまさにここに存するのであり、それがとりもなおさず今後我々研究者に課せられた課題であると言えよう。

一九八二年三月十五日発行
人文書院　二五一頁　一八〇〇円